

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月17日現在

機関番号：32646

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520161

研究課題名（和文）現代日本における南アジア音楽の受容と変容

研究課題名（英文）The Reception and Acculturation of South Asian Musics in Modern Japan

研究代表者

小日向 英俊（KOBINATA HIDETOSHI）

東京音楽大学・音楽学部・非常勤講師

研究者番号：00399742

研究成果の概要（和文）：本研究は、1950年代以後の日本における南アジア音楽・舞踊に関する主に公的・準公的部門が担った学術研究、演奏家招聘、音楽出版物発行などの受容形態、'80年代以降の私的興味に基づくインドでの音楽学習活動、'90年代以後の表現者による現地オリジナル様式や、他ジャンルとの融合様式による表現活動を研究した。南アジア音楽の受容が現代日本にある程度広まり、日本における変容の姿があること、受容が進行していることについても確認した。

研究成果の概要（英文）：The scope of this study covers reception of foreign musics in modern Japan, particularly: 1. Reception of South Asian musics by the public/semi-public sectors, including academic studies on South Asian musics at universities, organizational invitation activities of South Asian musicians for performance in Japan, and commercial recordings of South Asian musics in Japanese market in music publishing business; 2. Reception of South Asian musics in the private domains, including music learning by Japanese youth particularly in India after the '80s, and South Asian music performances by Japanese musicians after the '90s in original and hybrid music styles. This study confirmed that South Asian musics have been received in modern Japan to some extent and their integration into Japanese society is on the move.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1950,000
2010年度	900,000	270,000	1170,000
2011年度	900,000	270,000	1170,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学・南アジア音楽の受容・ワールドミュージック・現代日本の音楽文化・Acculturation・文化変容・伝統音楽・インド

1. 研究開始当初の背景

(1) 南アジア音楽と日本人：研究代表者は、音楽学を専攻して南アジアの音楽文化研究を進める過程で、南アジア音楽への関心が日

本において高まり、南アジア音楽の聴取にとどまらず、人々が現地に足を運び音楽を学習する事例に多く接してきた。南アジア音楽は聴取・鑑賞行動の対象ばかりではなく、学習

し表現活動を行うという実践の対象にもなった。こうした観察から、'70年代後期および'80年代初期に始まる音楽動向を、異文化の受容と変容という視座から研究することを構想した。

(2) 欧米における異文化音楽： 米国では早くも、'50年代に始まった民族音楽学 (Ethnomusicology) や'60年代に世界音楽 (World music) の名称の下で開始された非西洋音楽の学術研究を通じた異文化音楽の受容があった。また'80年代欧州に始まった音楽産業における新ジャンル、ワールドミュージックの隆盛の現象も存在した。世界的に見て、非西洋の音楽文化への関心が高まる中、日本でも南アジア音楽を含めた異文化音楽への関心が高まったと言える。

(3) インドと日本の関係： 一方インドにおいても、1991年に始まる経済開放およびその後の経済発展、情報流通の加速化を背景に社会インフラの整備も進み、異文化の人間によるインド滞在時の障害も相対的に低下していった。これらのことが相乗効果として作用し、異文化との接触を容易にしたと考えられる。

(4) 受容史： 北インド音楽の楽器シタール (Sitar) の演奏者として観察し、日本の音楽状況の上記のような変化を同時代的に見るなかで、音楽受容を通時的観点から考察し、日本における異文化受容の姿の一端を考察できればと考えた。

2. 研究の目的

(1) 現代日本 (第二次世界大戦後) における日本人と南アジア音楽の接触、音楽学習および演奏活動を、雑誌記事、新聞記事、関係者の著作および証言を中心に調査し、南アジア音楽の「受容」を歴史的にとらえること。

(2) 日本における南アジア音楽の演奏の特質を探ること。日本に受容されて日本の音楽文化の文脈で行われた南アジア音楽の演奏記録物の収集、現在の演奏を記録・分析、南アジア現地での演奏との比較を行う。インド芸術音楽の標準的様式の保持、そこからの逸脱や変化、演奏技術のレベル、演奏ジャンル、および他のジャンルとの融合の諸相についても、具体的な演奏資料の収集・分析を行い、南アジア音楽と他のジャンルとの接合・融合、音楽の「変容」の様子を分類整理し明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 関連先行研究探査、基礎資料の収集： 日本における南アジア音楽の受容に関する関連先行研究、1945年代以降に国内で発行された南アジア音楽に関する視聴覚資料 (SP, LP, テープ, CD, 映画, VHS その他の媒体)、

および同音楽の演奏記録などの基礎資料探査および収集。

(2) 日本人実践者たちの情報収集： 南アジア音楽の教授、学習、演奏、聴取活動を直接担う人々だけではなく、こうした活動を支える個人、団体、組織、法人についても、その存在を把握し考察。

(3) フィールドワーク： 東京、名古屋、京都・大阪、福岡などを対象に、実践者の演奏活動を観察、インタビュー。

(4) 記録の作成： 上記フィールドワークでは、南アジア音楽の様々な演奏の実態を、映像記録として保存。

4. 研究成果

(1) 前史： 本研究が対象とする時代は第二次大戦後日本の音楽状況ではあるが、通時的に南アジア音楽と日本人の接触を俯瞰する意味もあり、江戸末期、明治期におけるインド音楽との接触およびその可能性についても確認した。

① 開港直後の横浜港地域： 慶応年間 (1865-1868) のある時期にイギリス軍の一員として、現パークスターンのバローティスターン州出身のインド兵が関内地区内に駐屯した。日本人との直接の音楽交流はなかったと推察されるが、出身地の民謡などをロザさんだと想像できる。軍事という公的活動においてインド音楽が異国の地で鳴り響く可能性を示唆するものである。

② インドの音楽学者 S.M. タークルとの交流： インド音楽書とともに彼が1877年[明10]に日本の皇室に寄贈したインド楽器は、高度な装飾を施し美的価値の高いものであった。彼のインド音楽近代化思想と世界への啓蒙活動の一環として日本にもたらされたものであった。実際に音を出すための楽器ではなく、これを直接見た日本人も存在したが、それはインド音楽を「見る」経験であった。寄贈楽器は、現在東京国立博物館に所蔵されている (東京国立博物館画像検索：<http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/index>にて、画像番号、C0095649、C0095647、C0095645)。

③ タゴール・ソングの受容： アジア人初のノーベル文学賞受賞者ロビンドロナート・タークル (1861-1941) が創作した多様な詩作と歌は、彼の日本滞在 (1916年[明49]) の際に披露された。この歌の愛好者は現在も日本に存在し、これに関する著作も出版されている。生誕150周年となった2011年には、

縁のある人々により記念事業が行われた。

④ インド人商人の横浜居住： 明 30 年代（1897-1906）には、西インド出身のパールスィーとシンディー商人たちが、横浜の地で活躍した。神戸へ移住した者も含め、日本におけるインド人コミュニティの原形となったものである。日本人ホスト社会とどのような音楽的交流があったかについては、未調査のままとなった。

⑤ 国内外における位置づけ： 本研究の対象外の時代ではあるが、当初の想定を超えて、早い時期に日本人とインド音楽との接触が存在したことを確認できた。明治期横浜でのインド人コミュニティと日本人との音楽交流については、未調査であるため、今後の課題として研究を進めたい。

(2) 公的・準公的受容： 南アジア音楽は、1950 年代より大学における民族音楽学研究所の研究対象として受容され、研究者の教育活動、学会活動および啓蒙活動により日本への紹介が進んだ。また音楽文化団体、文化交流団体、音楽出版社らによる組織的な文化紹介活動を通じて、南アジア音楽に接触する日本人が増加した。戦後からおよそ '80 年代における南アジア音楽の受容史は、主にこれらの公的・準公的部門が担ったと言える。

① 学術研究： 民族音楽学者小泉文夫（1927-1983）などにより、日本でも '50 年代から異文化音楽研究が進んだ。特に彼のインド留学（1957-58）は、戦後の日本人がインド音楽に直接、しかも現地で触れたという画期的な事例であった。音楽学研究者の間に南アジア音楽の理論的側面とともに実際の知見がもたらされ、舞踊も含めてインド音楽に関する論文・書籍の刊行が行われた。この分野の中心的学会である社団法人東洋音楽学会でも、その研究発表が行われ、後進研究者も生まれた。また研究者たちは、以下に述べる準公的受容への専門知識提供を担っていた。準公的部門の経済力を活用した協働により、南アジア音楽の知識普及と、実演や録音物を介した紹介が進んだ。学術研究による知識の吸収から社会への普及に繋がったこの事例により、公的受容が果たす大きな役割を改めて確認した。

② 音楽文化団体： 本研究では、戦後日本の一般社会への音楽文化普及に影響力を有した 2 つの音楽文化団体、勤労者音楽協議会（労音 [1953 年設立]）、民主音楽協会（民音 [1963 年設立]）の南アジア音楽との関わりを考察した。後者は 1971 年より、南アジア音楽の紹介を定期的に行った。団体スローガン

の 1 つ「グローバルな音楽文化交流」の具体的事例となるものだった。セイロン（現スリランカ）も含め、南アジアの舞踊伝統の招聘例が目立った。器楽演奏の抽象性ではなく、舞踊の具体性が、選択の基準だと思われる。また宮廷生活に根ざした古典舞踊ばかりではなく、民俗舞踊も多く紹介された。異文化間が接触する際に何が受け入れられ、何がそうではないかというフィルター作用を考える上で興味深い。一度の招聘事業では、東京、福岡、岡山、神戸、浜松、京都、名古屋、山形、仙台、新潟など全国各地で公演が行われた。民間の中から立ち現れ公共に寄与する目的の組織体が異文化音楽の受容に関わったことが確認できた。この活動には、学術分野の専門知識が提供され、プログラム構成、招聘対象者の選定などに寄与したことは、公的部門と準公的部門の連携事例として興味深い。

③ 音楽出版： 音楽の受容過程において、録音物による音楽普及も重要な側面である。日本のレコード会社による異文化音楽の商用販売は、古くは戦前の事例もあるが、大型出版は '80 年代の LP 販売から始まり、CD に移行した。'80 年代初期の南アジア音楽の音源は、研究者のフィールド録音や外国での既存の出版物であり、半ば音楽資料として刊行された。その後、制作会社の独自現地取材や音楽家の招聘機会を利用した日本での録音が行われ、シリーズ化されて販売された。扱われる音楽ジャンルは、宗教音楽、芸術音楽（北インド、南インド）および民俗音楽である。これらの点から、音楽出版においては、南アジア音楽が「資料」として扱われ、半ば啓蒙的意義を持たせながら発行されたことが推察される。現地で流行していた映画音楽の販売は、数少ない例外を除き存在しない。南アジア音楽は、'80 年代後半から '90 年代にかけてのいわゆるワールドミュージックブームを経た後、他の音楽ジャンルと融合した様式の一部として受容され、あるいはヨーガブーム、「癒やし系」音楽の一部として、効果音、映像の背景音として多くの CD や DVD で受容されている。

④ 国内外における位置づけ： '50 年代から大きく進展する米国の民族音楽研究は、同時代の作曲家の意識や活動にも多くの影響を与えた。「異国音楽」の要素を利用した作品が創作された。また米国内の南アジア系移民の間では、南アジア音楽の演奏が行われている。高等育機関での研究から南アジア音楽の受容が進む過程は、日本の場合と同様にも見える。しかし、移民コミュニティの音楽受容における影響力は、米国の方が大きいとの意見がある。この点は、米国や例えば U.K.

などの事例との比較により、新たな視点が見えるだろう。また日本においては、「インド音楽の影響はビートルズからだ」との言説もあるが、一方で学術機関や音楽文化団体などの活動が影響を与えたことも確認できた。

(3) 私的受容：本研究では、'70年代中期から'80年代以降に顕著となった、個人による南アジア音楽への関心の高まりも注目した。ここでは、(2)①「学術研究」から派生した啓蒙活動や、(2)③「音楽出版」の商用録音物の聴取により、南アジア音楽の情報に接して学習過程に入る事例、現地での学習の後に帰国して日本で何らかの表現活動を繰り広げる事例などを中心に観察した。これらの活動は、公的・準公的受容過程で流通し始めた情報を介して、人々が当該音楽に興味を抱くのである。公的受容により社会の広い範囲に情報が伝播し、受容形態も理論研究から聴取そして実践へと転換していく、1つの過程と捉えてよいだろう。

ただし南アジア音楽は、高等学校レベルまでの音楽科授業では「諸民族の音楽」の1つの項目にすぎず、教員の裁量によりその扱いは一様ではない。公的・準公的受容過程といっても学校教育ではなく、公共放送番組や音楽公演での聴取が契機となった人が多い。

これらの人々は、自らの表現活動として南アジア音楽を演奏するのみではなく、生計の目的から音楽の教授活動も開始する。カルチャースクールの1講座として成立する場合もなくはないが、通常は個人経営の音楽教室の体裁を取ることが多い。その場合、南アジアにおける師弟関係が日本でも再生産されやすい。ときには流派や現地の師匠間の社会関係が日本にも投影される様も観察され、同じインド音楽や舞踊に関わる日本人の間に、協力や協働が生まれにくい側面も観察された。

一方、日本における教授活動の結果、南アジア音楽を日本で学ぶ人々の数は増加しており、同じ師を共有する兄弟弟子の間には、現地の師匠を日本に招聘するなどの場合に協働していく現象も存在する。また、これらのセクショナリズムを超越して、同じ南アジア音楽に関わる者として、日常的に接触して練習を行う事例も見られる。研究代表者の近年のフィールドワークの中では、インド音楽の聴衆を増やすために、ワークショップなどを開催して、より深い理解の醸成を目指す活動も観察される。

① 現地での音楽学習：'70年代中期から'80年代にかけて、当時20歳代であった若者たちが公共放送や音楽公演などを通じて、南アジア音楽に触れた。The Beatles の特にジョージ・ハリスン(1943-2001)が、インド音楽の要素を西洋ポップスに取り入れてイ

ンド文化への傾倒を示したことも、日本の若者たちに影響を及ぼした。実際このことを通じて南アジアの音楽を知り、その後インドへ音楽を学びに行く事例もあった。また旅行で、現地の音楽に出会うケースも多くあった。

現地での音楽学習については、カラークシエトラ(チェンナイ市)などの専門教育を行う学校に入学する例と、師匠(グル)に個人的に弟子入りしながら、日本とインドを往復して学び続ける事例がある。数としては後者が多かった。いずれにしても、調査でインタビューに応じた多くの実践者たちは、北インドおよび南インドの芸術音楽や古典舞踊の領域で真摯な態度を持ちながら現地の師匠と良好な関係を築き、長い場合は10年にわたる学習を続ける場合も多い。彼らが帰国する'90年代前後以降は、演奏活動と教授活動が開始される。

② 表現活動：'90年代より、日本人による南アジア音楽の演奏活動は盛んになった。演奏機会は様々であるが、在日インド大使館はこうした演奏者に定期的に演奏機会を与えていた。また、各種文化イベントなどに招かれる場合、自主公演として自ら演奏機会を作っていく場合がある。「ナマステ・インディア」を始め、現在は少なくともインド、パーキスタン、ネパールの各国をテーマとしたフェスティバルが毎年開催されており、そこで披露される音楽・舞踊のほとんどが日本人演奏者に担われている。

いずれにしても、彼らは音楽事務所などに所属して一定の収入を得ていくのではなく、主に音楽教室や舞踊教室の設立と生徒への教授で、収入を得るケースが多い。特にリズム楽器の場合、南アジア伝統様式の演奏だけではなく、様々な音楽ジャンルとの接合を試みるケースが多い。フラメンコ音楽との融合、いわゆるエスニックな楽器を中心とした即興音楽(トライバル・ダブ)への応用、様々な演劇や放送番組における効果音などへの応用例が知られる。

CDのリリースも'90年代から行われるようになり、伝統様式を収録するもの、融合様式のもの、実験的性質を持つものなど、多様な内容が発行されている。ただし、これらの発行部数は多くはない。共演者として現地の演奏家を招聘して制作するケースも多くなり、音楽の質は決して低くない。実際、彼らの中には、現地のコンクールで上位を占める事例、毎年のように現地の音楽祭に出演する事例がある。

③ 音楽ジャンル：南アジア音楽と言えば、誰もが思い描くのはスィタールとタブラーであろう。'80年代初期にはその他北インドのサロード程度の種類しか受容されなかつ

たが、漸次楽器の種類も多くなり、南インドの打楽器ガタムといったなじみのない楽器を専門にする者すら出ているのが現在の姿である。南アジアの芸術音楽使用される楽器のほとんどに、日本人奏演者がいるといっても過言ではない。舞踊についても同様である。声楽では、北インドの歴史的様式であるドゥルパドを学習し歌う例も出てきている。

また芸術音楽のみではなく、ベンガル地方の宗教伝統であるバウル音楽の事例や、インド映画の踊りボリウッド・ダンスの人気も出てきている。現在の日本では、インドの芸術音楽を中心に、その他さまざまな様式を奏演する者が存在する。これらの表現活動の質と多様性を定量的かつ網羅的に把握する手段はまだ存在しないが、収集した公演情報に基づけば、定期的に南アジア音楽を奏演する者の数は、少なく見積もって100名前後であると推察できる。また、彼らの活動地域も東京のみではなく、名古屋、京都、大阪に広がり、現在は仙台などにも広がりを見せている。その学習者の数はその数倍になると考えられる。日本で受容される他地域の異文化音楽についても定量的・定性的に研究し、データを比較検討することは有意義だと考える。

④ 招聘活動： これらの実践者の中には、自らの師匠や関係者を日本へ招聘して、インド音楽を紹介したいとの欲求を持つ者がいる。これは、日本へ行って公演したいとの現地からの要求に応える側面もある。南アジア系在日大使館が積極的に関わる事例は少なく、招聘者は個人でまたは仲間との協働により、公演場所の手配、招聘事務全般、経済的・時間的負担を負いながら、公演を実現させている。近年の聴衆の数は少しずつ多くなる傾向があり、1公演の集客が300名～400名程度までになる場合もある。

⑤ 変容： 南アジア音楽の受容の進行につれ、現地とは異なる演奏・聴取形態、様式などが現れた。ここでは、およそ'90年代以降に現れた融合形式についてのみ触れる。変容は、リズム楽器関連、旋律楽器や声楽、および舞踊の3領域となる。

打楽器タブラーは、芸術音楽から宗教音楽など幅広いジャンルをカバーする。高音の乾いた響きと低くうねりのある音という音色的な対比、両手の指や手のひらを駆使した超絶的速度での演奏に特徴がある。こうした点から、効果音的な使用方法として多くの映像作品に応用されている。また、ターラのリズム周期の考え方を軸にしてフラメンコに応用する例などもある。また、ラヤカーリーというリズム分割法を応用して、リズム作品を創作する例も観察される。芸術音楽を演奏できる十分な知識と技術を応用して新しい音楽

が創作されている。その他、(3)②で取り上げた事例がある。

旋律楽器では、スィタール(弦)、サントゥール(弦)などの事例がある。その共鳴弦は音響的特徴を持つため、スィタール数台と他の楽器を含めた集団即興、サントゥールをハープのように使用する例などがある。ただ、上記いずれの場合も、西洋芸術音楽の伝統の中でこれらの楽器を応用した例は、日本では創作されていない。また南アジアの音楽が、瞑想やヨーガなどの活動と結びついて演奏される事例などが多く見られる。つまり、南アジア音楽の即興的性格、共鳴弦などの音響的特徴、特徴的な理論体系などが他の音楽ジャンルと結び合わされ応用されていると言える。舞踊については、コレオグラフィーを他ジャンルと接合するのではなく、インド神話の代わりに日本でも理解されやすい古譚などをテーマに上演する試みが多い。

⑥ 国内外における位置づけ： 南アジア音楽の受容過程では、公的・準公的受容に続いて、私的受容が存在した。前者における学校教育での受容は、初等・中等教育レベルまで広がったことはない。この地域の音楽はあくまでも鑑賞教材として、教室で見られるにとどまる。大半の音楽科教員にとり、南アジア音楽を実践的観点で指導して音楽の多様性を教授することは困難である。これらの実践者たちとの協働も必要ではないだろうか。南アジアばかりではなく、他の地域の異文化音楽についても同様のことが考えられる。

公教育経路で普及が図られ、「正統な音楽」「高度な音楽」との位置づけが与えられる西洋の芸術音楽とは異なり、南アジア音楽はあくまでも「異国の音楽」として存在し、その受容は限定的である。しかし本研究では、南アジア音楽に興味を抱き、実践し、これらを音楽活動として体現する人々の姿を確認できた。こうした私的受容の将来の動態はどのようなものか、興味深い点である。

(4) ネットワーク的受容： 私的受容が発展していく先に見えつつある受容形態に名称を与えたものである。社会インフラとしてのインターネットを通じた受容という意味と、公的領域、準公的領域、私的領域といった個別の社会セクターが、ゆるく交流し始めるかもしれないという期待も加味した名称でもある。

インド芸術音楽とインド映画音楽は、'90年代のネットニュースやユーズネットを利用した情報交換のテーマともなっていた。しかし、これらのサービス空間での共有言語は英語であり、日本人がかかわる事例は少なかったと思われる。現在、日本でも多くのユーザを有するSNSであるFacebookやmixiなど

では日本語による交流が可能であるとともに、画像、音声、動画も包含して扱うことができる。

現地インドに師匠を持つ学習者、日本人のインド音楽教師に習う学習者、および南アジア音楽愛好家などは、SNS や Twitter を利用して頻繁に情報交換を行っている。特に SNS では、時空を超えてイベントの告知や報告を容易に行うことが可能なため、知り合いの人々に対して情報を波及させられる。また情報のやりとりは双方向的であることが、旧来の印刷媒体や電子メール、Web での告知とは異なる。

ネットワーク上の交流と同時に、日本各地に散らばる実践者たちが、お互いに交流を持つ事例も頻繁になった。招聘事業でも、各地の担い手が連携し、行政や宗教団体などと手を結ぶ事例も次第に増えているように思われる。連帯や協働、共有といったキーワードで語ることができる活動が広がりを見せているように感じられる。こうした動向の将来が楽しみである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① KOBINATA, Hidetoshi, *The reception of cross-cultural musics in modern Japan and the role of Min-On: With a focus on South Asian musics* (現代日本における異文化音楽の受容と民主音楽協会の役割 : 南アジア音楽を中心に) . 『国立音楽大学研究紀要』、査読無し、44、2009、93-103、抄録 : http://www.lib.kunitachi.ac.jp/mokuji/kiyo/shoroku/2009/kiyo2009_9.htm

② KOBINATA Hidetoshi, *South Asian Musics in Recordings : Old and New Publications in Japan* (南アジア音楽の録音物 : 日本における新旧刊行物) . 『国立音楽大学研究紀要』 査読無し、46、2011、127-136、抄録 : http://www.lib.kunitachi.ac.jp/mokuji/kiyo/shoroku/2011/kiyo2011_13.htm

[学会発表] (計 7 件)

① 小日向英俊、「インド音楽・舞踊の日本における受容」、現代インド地域研究国立民族学博物館拠点合同研究会、2013 年 2 月 16 日、国立民族学博物館 (大阪府)

② 小日向英俊、「インドを奏でる人々その音楽受容と変容」、日本音楽学会、2013 年 1 月 19 日、東京音楽大学 (東京都)

③ 小日向英俊、「現代日本におけるインド音楽の変容-音楽多様性と音楽ハイブリディズム」、一般社団法人東洋音楽学会、2012 年 11 月 11 日、国立音楽大学 (東京都)

④ 小日向英俊、「インドを聴く・見る・演じる人々-日本における異文化音楽受容史の視点から- (映像発表)」南アジア学会、2012 年 10 月 6 日~7 日、東京外国語大学 (東京都)

⑤ 小日向英俊、「無料動画配信サービスにおける世界音楽受容と発信-南アジア音楽の事例-」、一般社団法人東洋音楽学会、2012 年 4 月 21 日、東京藝術大学 (東京都)

⑥ 小日向英俊、「北インド音楽様式ドゥルパドの技法 (映像発表)」、(社) 東洋音楽学会、2010 年 11 月 14 日、東京学芸大学 (東京都)

⑦ 小日向英俊、「1980 年代以降の南アジア音楽受容史-「私心」による交流とその未来」、(社) 東洋音楽学会、2010 年 11 月 14 日、東京学芸大学 (東京都)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計 0 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

<http://kaken.musinglobe.com/kakentop/TO P.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小日向 英俊 (KOBINATA HIDETOSHI)

東京音楽大学・音楽学部・非常勤講師

研究者番号 : 00399742

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :